

17 『誰がために鐘は鳴る』

『誰がために鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls*, 1940) は、スペイン市民戦争を巡るアーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の反ファシズムの立場のみならず、共和派軍のプロパガンダにも与しない彼の政治姿勢から創作された長編小説である。初版の7万5,000部は瞬く間に売り切れ、出版から6か月後には販売部数が49万1,000部に達するほどの記録的売れ行きを示し、一躍脚光を浴びている。作品の題名は、イギリスの詩人ジョン・ダン (John Donne, 1572-1631) による「死に臨みての祈り」(*Devotions upon Emergent Occasions*, 1624) の中の「瞑想録17」に由来しており、その一節は物語の巻頭において引用されている。

物語は1937年5月末の土曜日から翌週火曜日までの約70時間で展開している。主人公はアメリカの大学でスペイン語講師を勤めていたロバート・ジョーダンであり、彼は1年間休暇を取って共和派の義勇兵としてスペイン市民戦争に参戦している。そしてゴルツ将軍によって、鉄橋爆破の任務を受ける。これはフランシスコ・フランコが率いる反乱軍側を空爆するとともに、幹線道路の鉄橋を爆破することによって援軍を阻止し、退路を断つという極秘作戦の一環であった。

鉄橋爆破後の撤退に際して、ジョーダンは敵軍の砲撃に遭い、馬の下敷きになることで脚に重傷を負う。逃走が不可能であることを察知した彼は、ゲリラ隊を避難させ、敵のさらなる進軍を阻止するべく一人でその場に残る。こうして深い恋仲になったマリアとの未来生活は叶わなくなるものの、彼は自らが生きる世界を肯定的に認識する。そして「この世界は美しいところであり、そのために戦うに値するし、おれはこの世界を去ることが本当に嫌だ」(474) と独白している。このように『誰がために鐘は鳴る』には、同様に戦争を背景にした悲劇的な恋愛を描きながらも、深い喪失感とともに結末を迎える『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*, 1929) とは対照的な一面を見てとることができる。

この物語の創作に際して、ヘミングウェイは進捗状況を隨時スクリブナー社の編集者マックスウェル・パーキンズに報告し続けたほか、彼から指摘された難点の大部分に対して素直に応じ、原稿の書き直しや削除を行っている。しかし「ジプシー」(*gypsy*) の血を引く登場人物ピラールに語らせた死を予知する根拠となる死の臭い (*the smell of death*) についてのエピソードは、物語の展開を遅らせないように短くすることを求めたパーキンズに真っ向から反対し、その提言を受け入れることはなかった。ヘミングウェイがスクリブナー社の社主チャールズ・スクリ

ブナー三世とパークインズそれぞれに宛てた手紙からは、彼がこの死の臭い、すなわち「ジプシー」の神秘的感性の描出にかなり固執していたことが窺える (Baker, *Letters* 508, 513)。

従来、ピラールの予知能力を巡っては、ジョーダンに迫りくる死を巡る予見のモチーフを具体化するものの一つとして見なされることが多かった。しかしへミングウェイが「ジプシー」の神秘的感性に執心した背景には、彼の父親クラレンスへの想いが潜んでいるとも考えられる。そもそも父親の自殺は「詩、1928年」("Poem, 1928," 1979) や短編「父と息子」("Fathers and Sons," 1933) といった作品において断片的に距離を置いて描かれてきたが、その詳細はついに『誰がために鐘は鳴る』において、ジョーダンの意識や姿勢を通して描き出されているからである。しかもクラレンスの死後に出版された作品群において、ジョーダンは自殺した父親に対する理解を初めて表明した主人公なのだ。

ジョーダンは南北戦争において勇敢に戦った祖父を精神的指針としながら、自らと父親との対照性を意識している。また彼は死の恐怖を排除するために、そして父親と同じ臆病者と判断される可能性ゆえに、ピラールに見る神秘性を頑なに拒否しようと試みている。臆病さと結びつく父親の自殺は、ジョーダンにとって容易な理解や共感を阻むものだったのだ。しかしその一方で、自らが依拠する合理主義的な判断とは相矛盾するピラールの予知内容（ジョーダンの死）を受け入れ、行動し始めるこによって、彼は初めて父親に対する理解を表明することが可能となる。この点において、『誰がために鐘は鳴る』はジョーダンの抱く合理主義が否定され、「ジプシー」の神秘主義的感覚が肯定される物語として読まるべきだろう。

ヘミングウェイが物語において父親を描くとき、従来の作品には見られなかつた一つの状況設定に重点が置かれているように見える。彼が推測した父親の自殺の主な原因是、末期的段階に向かって不可逆的に進行していた病だった (Baker, *Life* 199) が、ジョーダンが父親の自殺に対する理解を表明するに至るまでには、自らに差し迫る死を受け入れながら行動する必要があった。そこにはクラレンスが追い込まれた宿命的な閉塞状況に想いを馳せることによって、勇猛果敢に挑み続けることのなかった点においては反発しながらも、初めて父親の死を理解することが可能となった作者自身の複雑な意識が透けて見えてくる。『誰がために鐘は鳴る』は、もう一つの「父と息子」の物語でもあるのだ。それゆえ、死の臭いが象徴する「ジプシー」の神秘的な予知能力は、削除してはならない物語の重要な構成要素だったのである。

(本荘 忠大)